

< 日本文化開国論 >

= 思想編 =

- ・目次
- ・今、なぜ開国なのか
- ・世界から注目されている日本
- ・諸外国からの文化・文明の輸入
- ・ブレイク・スルーの道はあるか
- ・我が国の役割を考える
- ・「今」だからこそ、日本文化開国論は機能する
- ・日本文化の特質と現代科学
- ・日本文化開国の視点
- ・日本文化開国論の具現化
- ・結びー「日本文化の学び」と言う平和産業の輸出を

■今、なぜ開国なのか

昨年来、国の政策課題の一つにTPPの問題があります。

ここで、その事の是非を論じるつもりはありませんが、「第三の開国」と言う表現に、違和感を覚えました。第一であれ、第二であれ、これまで「開国」と言えば何かしらの規制の枠を取り払う、という意味で使われてきたと思いますが、今回の「第三の開国」もこれと同じ意味だと認識しています。

ただ、諸外国との交流に於いて、こういった通商上の枠を取り払うという開国で、果たして、本当の意味で開国した事になってきたのでしょうか。国と国とのお付き合いが、それぞれ納得のいく形でなされ、相互理解につながったのでしょうか。あるいは、我が国の姿が、諸外国に正しく理解されてきたのでしょうか。経済大国という経済的な面での関係性しか見えてきません。今まで使われていた開国という言葉からは、経済戦争のただ中に置かれてきた様に感じるばかりです。

勿論、そういった世界の動きを抜きにして考えている訳ではなく、後述しますが、欧州の金融危機や TPP 等がテーマになっている今の状況だからこそ、日本と言う国の姿を、世界に向かって開いてゆく事が、諸外国にとっても、これからの世界の有り様を考える上に於いても、様々な点で参考になるところがあるだろうと考えているからです。

なにしろ、日本と言う国は、農耕民族として概ね同じ文化のもとで何千年という永きにわたって同じ島国の中で暮してきた国です。その根源の在り様が、文化や文化財として残っているし、戦後に於いても、単に法律としての平和憲法を守ってきたから、これまで数十年間も平和で来られたと言う観念的な理解からではなく、そういった理念を持ち続けられる過去からの反省と、その事をも含めた、それぞれの人びとの心の中にある根源的なものの見方や考え方、精神性があつたからではないでしょうか。

■世界から注目されている日本

私たちは、平成23年3月11日、東日本大震災が発生、その後、津波や福島第一原発の事故と、未曾有の現実を目の当たりにしました。今も、その惨禍は終わっていません。痛ましさと共に、規模、内容は違えども、阪神・淡路大震災を経験した一人として、その時の思いが蘇ってきます。

同時に、被災地の人びとの対応ぶりに、世界の人びとは驚きと共に賞賛の声を上げました。世界各国の報道から、その反応が伝わってきましたし、その事が、世界から見た日本のお国柄に対する評価を端的に反映したもの、と言う認識を持たれた方も多かったのではないかと思います。先日来日された、若きブータン国王ジグミ・ケサル陛下の国会での演説（<http://www.youtube.com/watch?v=-h5CzvtJky8>）にも、同じ様な認識が示されています。

また、同年9月にお亡くなりになられたケニアのノーベル平和賞受賞者であるワンガリ・マータイ女史によって広められた「MOTTAINAI（もったいない / <http://mottainai.info/maathai/>）」という日本語とその概念の紹介によって、世界の人びとは我が国に対する新たな評価軸を知ることとなり、その概念を醸成した日本という国に対する好奇心をも掻き立てる結果となり

ました。（余談になりますが、私は、「おかげさま」という言葉も日本人の精神性を表す代表的な言葉だと思っています。）

これら、最近の出来事を見た時、世界は、今また「不思議の国“ニッポン”」の真の姿を見つめようとしているのではないのでしょうか。

これから始まる、十数年間を要するであろうと言われている、本格的な東日本大震災の復興事業の間、世界の国々は、第二次大戦後の復興ぶりを驚嘆を持って見た様に、今回の東日本大震災の復興についても、じっとその過程を見続けるだろうと思うし、その復興過程から、諸外国の人びとは、何かの気付きと学びを得る事と思います。

東西冷戦構造が瓦解し、今また共産国の自由主義経済化と、他方、リーマン・ショックやEUの金融危機など、自由主義経済そのものへの不信感も芽生え始め、地球上で共に暮らす人類そのものの、社会システム全体のあり方が問い直されようとしています。

地球規模での見直しであり、社会システムを初めとした、私たちが生きてゆく上での価値観そのものが模索されていると考えて良いのだと思います。

こういった世界の動きの中で、前述した震災を巡る東北の人びとの対応は、人と人とのツナガリ、日本人の行動原理や自然と共に暮らしてきた日本人の暮らしぶりなど、日本文化そのものの基底に存在する「なにものか」に対する知的好奇心や知的欲求が、海外の人びとの心の奥底に内在化されている、と感じているのは私だけではないと思います。

■諸外国からの文化・文明の輸入

一方、これまでの我が国の歴史を振り返る時、遣唐使や仏教伝来、その後の蘭学、遣欧・遣米使節、また、明治維新における文明開化や脱亜入欧といった様に、常に我が国は、海外から文化、文明、社会システムなどを取り入れて（輸入して）今日に至っています。

17世紀の産業革命を例にしても、我が国はいち早くそれらの文明を取り入れて新たな産業を興し、経済的な豊かさと共に生活の変革をしてきました。勿論、そういった産業導入によるプラス面だけではなく、マイナス面にも目

を向けなければなりません、ここで注目したいのは、それらの新しい文化や文明を取りに入れる際のあり方であり、我が国風アレンジして取り入れてきた、人びとの内面的な在り様です。

例えば、産業革命の一つに動力革命がありますが、蒸気機関から生まれた鉄道を見ましても、我が国は、イギリスやドイツ、アメリカといった国々から技術と共に人材等も輸入し、いち早く全国に鉄道網を敷くと同時に、現在では、他国の機関車列車方式（機関車と客車との編成 / 動力集中方式）とは異なる、日本の国土に合った電車列車方式（電車による編成 / 動力分散方式）を進め、世界に冠たる新幹線と言う鉄道技術を完成させるまでになっています。新しい技術をすぐさま吸収し、我が国に適した様に変えて導入したとも言えます。

ただ、それらの新しい文化や文明を導入し、新たな社会システムや技術開発等によって今日の繁栄をもたらした事も事実ですが、反面、人類の諸活動そのものから引き起こされる自然破壊や CO2 排出の問題など、今まさに、人類と地球という自然環境との関係性が問い直されようとしています。

3・11の東日本大震災は、根底から、これまでの暮らしや価値観、自然観等に対する問いかけと転換を、私たちに要請している様に思えてなりません。

■ブレイク・スルーの道はあるか

東日本大震災を契機として、今まさに、海外から日本に対し、戦後復興を成し遂げた日本と、日本人そのものの精神構造や、それを培ってきた日本文化の総体に対して静かな 好奇の眼差しが向けられている、と前述しました。

人間と自然環境との関係性が問い直されようとしている一方、国内においても、産業の 国外移転や空洞化の問題、若者の雇用や社会的な労働環境の悪化、停滞が続く国内経済など、経済・社会的な面においても厳しい現実の姿があり、一步間違えば、世界恐慌に突入 すると言う論調も散見できます。果たして、これまでの様に、輸出産業に軸足をおいた経済活動による国の経済運営のあり方そのものに、疑問点はないのでしょうか。あるいは別の視点

から、私たちの生活を支える新たなコンセプトの構築は可能なのでしょうか。

勿論、これこれといった社会システムや産業構造等を提案できるほどの知識や能力が私にある訳ではありませんが、その端緒となる一助になればと言うのが、この日本文化開国論の本旨です。

人類の経済活動とは、多くの場合、地球の資源を基にして生産活動がなされ、その結果出来上がった製品等の国内での売り買いや、対外的な輸出によって生活を支え、富を生んできました。結果として、貧富の差が生まれ、極端な資本主義の考え方によって、富の偏在という現実も生みました。富と共に権力も一部に集中し、人びとの生命さえも脅かされるという現実も生まれています。果たして、この地球と言う星に生まれた人類が作りあげてきた文化や文明は、このまま永続する事ができるのでしょうか。

そんな疑問さえも生れ出てくるほど危機的な状況、それは、単なる皮相的な社会状況だけではなく、人びとの内面においても、そういった荒涼たる状況が生まれつつあるのではないかと思われまます。ここは一度立ち止まって、これまでの来し方行く末を考えなければならぬ時期に来ていると思いますが、現実には、それを許すほど時間的な余裕もないというのが、各国が置かれている状況なのではないか、と認識できるのも事実です。

また、「そんな甘い世界の状況ではない。世界の現体制が、それを許すかどうか、と言う現実もある」との声も聞こえてきそうですが、私は、今の高度映像情報化社会というこれまでの人類が経験した事のない社会が出現しつつあると言う現実を見落としてはならない、と思っています。

インターネットをはじめとした ICT 技術の進展は、すぐに国境を飛び越えて様々な情報が行き渡りますし、それに連れて意識や価値観も共有されていきます。文字情報だけではなく映像情報も瞬時に行き来しており、人びとの意識も、一昔前には考えられないくらいに高まってきています。インターネット社会が、国の体制までも変えてしまうという現実が表れて来ているという事も事実です。

高度映像情報化社会とは、単に情報だけが行き交うのではなく、その背後にある意識や物事の考え方も伝えていきます。その事を私は、「価値判断の基準が個人のレベルになる社会」と表現しています。

まるで、地球と言う脳細胞が巡るシナプスの様に、インターネット等の情報網が全世界を覆い、それれの神経系統から発せられる「情報」と言う名の信号によって知覚し、学び、判断し、行動するという、「生き物としての地球とその一部である人類」と言う認識と関係性が出来上がりつつある様です。個人個人のツナガリや意識のあり方が、その国の在り様を決め、その総和が大きく地球の未来を決めてゆくという状況になりつつあるのではないかと、と思っています。

これまでの国と国との関係性を超え、個人と個人とのツナガリが全世界的規模で可能になりつつあります。

私は、そこに、ブレイク・スルーの可能性を見えています。

■我が国の役割を考える

それでは、前述したような状況下に於いて、果たしてどの様な役割が我が国にはあるのでしょうか。

大雑把にはありますが、平和憲法を持ち、他の国に比して豊かな経済発展を遂げ、国内的にも比較的安定した状況にある日本という国は、それを構成してきた国民一人一人の内面と、その意識の総和としての結果が生んだものでした。

元はと言えば、その内面の精神性こそが、これまでの我が国を作ってきた根源のエネルギーであり、日本人としての特質であり、国を形作り、経済や社会、文化を創ってきた源です。

これまで、熱心に行なわれてきた海外の文化や文明、経済・社会システムなどの輸入をして我が国なりの発展をしてきたのも、これらの精神性が発露し、結実した結果です。

その総和としての国の役割として、混迷しつつある世界に向かって、今度は、政治や経済からではなく、日本文化の本質を披露（輸入に対する輸出ではなく）し、新たな世界観や経済・社会システム等を世界の人びとと共に構築してゆく役割があるのではないかと感じています。

以上のような文脈のもとで、これまで行なわれてきた海外との文化交流や広報活動、観光政策等の有り様を考えた時、より一層の充実が望まれると共に、その内容や方法についても再考する必要があるのではないのでしょうか。

翻って、これまでの方法と言えば、禅、茶道、華道、歌舞伎、柔道、等の文化を紹介するというものでした。あるいは、黒沢映画をはじめとした日本映画の数々、西洋絵画に影響をもたらした浮世絵など、それなりに海外に対する日本文化理解への貢献については一定の評価をしたいと思いますが、果たして、本論で示している日本文化の本質や総体を諸外国に伝える事になっていたのでしょうか。

これらの活動の結果が、未だに先の日本に対する「不思議の国“ニッポン”」や「経済大国とは言われても、決して文化大国とは言われない日本」という評価につながっていると考えられないのでしょうか。

単に、その機会の有無や量の問題ではないような気がしてなりません。

■「今」だからこそ、日本文化開国論は機能する

自然災害があっても、あるいは金融危機が迫っても、世界の目が、経済的に安定している日本、驚嘆を持って見つめられている日本に注がれている今だからこそ、日本文化の本質や総体を披瀝する事が、世界の人びとの内在化している不安や疑問に答える事であり、結果として、諸外国に対して我が国の真の姿をプレゼンテーションする事にもなり、より深い相互理解へとつながります。平和主義を掲げる日本の、その責任の一端を果たすことにもなります。

つまり、禅、きもの、歌舞伎、日本食、アニメ、といったような一時のブームによる日本文化の一断面からの理解ではなく、あるいは、自然の美しさや温泉等の自然環境のすばらしさに負うのでもなく、日本文化総体から醸し出される日本人の心の在り様の源泉を読み取りたいという諸外国からの潜在的な欲求に、どういう手法、どういったメニューで応えていくのか、という視点で考える必要があります、これまでとは違った我が国の対外政策のコンセプトを確立する事が必要になってきているのではないかと考えています。

これまでの様に、諸外国の状況を収集し、調査・分析し、あるいは、諸外国からの要望や要請に対応するという、受け身的な対症療法的な外交ではなく、今一度、我が国の文化的背景からの価値観に向き合い、これからの世界に貢献できる体制や社会システムを構築する役割を担うべきではないでしょうか。

3・11を経験した我が国が、「今」だからこそ、諸外国に対して開かれた日本文化を発信し、驚異的な復興と経済発展を成し遂げた我が国が、再び東日本大震災に対して同じ様に取り組もうとしている国民各層のエネルギーの源泉を披瀝する事が、新たな外交になると同時に、国内経済に対しても貢献できる方法だと思います。

諸外国の人びとが、日本文化の総体や根底にある精神性といったような、これまでになかった視点からの文化情報に触れ、知的好奇心が刺激されたとき、また、その情報に触発されたとき、「不思議の国“ニッポン”」や、「黄金の国“ジパング”」の今現在の姿を自ら発見して、自らの身体を運び、見たい、触れたい、感じたい、訪れたい、という思いに駆られ、より一層、我が国に対する良き理解者になって頂けるのではないのでしょうか。

フランスという国は、芸術から経済を生む構造の事を、「文化政策」と位置づけている様に、日本の文化を学び、もてなし、味わってもらおう仕組みから、国と国とのあり方を考える構造の事を、「文化外交」あるいは「観光政策」と考えても良いのではないのでしょうか。

■日本文化の特質と現代科学

それでは、日本文化とはどのような特質を持っているのでしょうか。

これまで、様々な日本人論が出版されてきましたが、その多くは、日本人のある一面的な評価や一時代の価値観、「侍」に代表されるある階級の処世訓といった視点からの評論の様に理解できると思いますが、ここに、日本文化を観る一例として、箱根山を貫く箱根用水という用水隧道があります。

今から約300年も前にできた用水路ですが、今の様な土木機械や測量技術のなかった時代に、人の手でどのようにして掘り進み、全長 1,280m、東西

両口の高低差 9.8m、平均こう配130分の1の用水隧道を完成させたのでしょうか。

研究者の調査・研究から、様々な知見が発表されていますが、注目したいのは、平均こう配130分の1、つまり、130m掘り進んでわずか1mの高低差を、1,280mもの長距離を保ってきた技術と、人びとの技術を育てた背景にある「水平感覚」が、農耕民族にとっては日常的な風景であった水田から育てられたのではないか、という視点です。

それは、川からの水を、どの水田にも等しく行き渡る様に考えられた工夫と、それらの用水を維持・管理している水利組合と言う互助的協働組織等です。

農耕民族であり、自然の恵みと共に、毎年訪れる台風あるいは地震等で、地域の人達が互助的な関係を作る事は自然の成り行きでしょうし、常に、自然の中で暮しているという自覚と、その恵みをいただいているという自然への感謝や畏敬の念を持つといった、この自然と人間との関係性こそ、日本文化の底流に流れている共通した思考の原点であり、精神性の根っ子です。

近代科学が生まれようとしていた16世紀の半ば頃、フランシス・ベーコンは、科学の目的を「自然を拷問にかけてその秘密をはかせる」と言う言葉で表現しています。

私には、科学を自然の上位に置いた言葉として、強烈に印象に残っていますが、その言葉の意味を象徴するかのように、現代科学の先端を走っていた「原子力発電所」が、3・11の地震とその後の津波で大事故を起こし、人間が制御できるかどうかの危うさを露呈させたと言う事実と共に、核廃棄物の処理さえままならないと言うこの現実・・・。

自然の一部としての人間であり、自然と人間との関係性が問い直されている例として、私たちの胸に迫ってきます。

また、環境問題等によって、循環型社会や共生社会といった概念も生まれ、生き方そのものも見直されようとしていますが、これらの概念さえも、もともとから日本文化の中に存在していた概念であり、これらの概念が尊重されていたならば、未だに処理できない廃棄物を生んでいる原子力技術が容認されるはずはなかったのではないのでしょうか。

これまでの「開国」によって、海外から文化や文明を受け入れる途上で、日本文化の根源にある価値観に気付く事なく、近代の科学技術に絶対の信頼性を置き、まるでその思想が日本文化の上に瘡蓋の様に覆い被さっているようです。

■日本文化開国の視点

日本の文化を紹介する場合に行なわれていた、具体的な手法の一つがこれまでのような海外での催しや博覧会等での発信でしょう。お茶やお花、あるいは歌舞伎の公演等、どれも代表的な日本文化の紹介である事に異論はありません。

しかし、今必要なのは、これまでと同じコンセプトでの新しいメニューの提示ではありません。

そのメニューがどんな器に盛られているのか、どういうシェフ、どういうコック、どういう板長によって作られた料理なのか、どんな内装の、どんなウエイトレスや女将さんのいる店なのか「それぞれ個別の実態ではなく、それを生み出している背景」といった、その総体、その総和としての日本文化の见えない本質を、どのように見せる（海外向けであれ、国内向けであれ）のか、というプレゼンテーションの内容や環境を整備する事が、すなわち、「日本文化開国論」の本質です。

別の面から考えてみると、我が国が「経済大国」と呼ばれて久しいのですが、今もって、「文化大国」と呼ばれるには至っていません。それは何故でしょうか。同じ産業政策を、他の国で施行したとしても、果たして同じような結果になったのでしょうか。

多分、答えは「NO」でしょう。

それは、これまでの産業政策を進めるにあたって、それを日本人が行ってきたという事実そのものにその本質が隠れています。

つまり、高度な教育水準と共に、西欧の人と日本人との物事に対する対応の仕方が異なっているからです。心の在り様が違うからです。

具体的な例を挙げれば、工場での工作機械にさえ人と同じ様に名前を付ける感覚や、休日になると、鏡の様に愛車を磨くお父さんの姿等、こういった「モノ」に対する愛情、あるいは、箸で食する習慣、綾取りや折り紙といったあそびなどから育まれた手の器用さ、野遊びをして暮した子どもの頃の自然とのふれあいから生まれる生命観などなど・・・。

あらゆる製造業に欠かせない技術力と、それを扱う技術者の技量等は、江戸時代ですら、世界にも秀でた識字率を有していた教育水準と共に、こういった子どもの頃からの文化的な環境から自然に育てられた資質であり、決して、教育と言う行為の成果だけではありません。教育と言う行為を受ける側の基底にある精神性が、それらを可能にしていると観るべきではないでしょうか。

仕事にしても同じ様に、単に金儲けをすれば優秀な人材というのではなく、企業人としてのあり方が厳しく問われますし、社会の規範に反した行動をすれば、社会から猛烈な反響があります。人格としてのあり方が、企業に於いても問われます。

勿論、現在の日本の企業、あるいは企業人の中にも、コンプライアンスさえも果たし得ない事例がありますが、それらは、その個人の内面形成、あるいは価値観の置き所の問題ではないかと思えます。あるいは、社会システムに潜んでいる経済合理主義という考え方そのものと、それを扱う個人の価値観との相関関係から生まれた事象であるとも言えるでしょう。

先にも述べた様に、導入されたいろいろな文化、社会システムが今日の日本を覆っているのも事実ですが、東日本大震災の様に、何か重大な事が起これば、その覆われていた日本人の本質が立ち現れてきます。まさしく、傷口を覆い被さっていた瘡蓋が取れる様に、その下にある本物の日本人の心の皮膚が現れてきます。

この「**日本文化開国論**」は、明治維新以後、戦後の経済発展の過程で覆われてしまっているさまざまな瘡蓋の上に、柔らかいガーゼのような膜（ネット/WEB）を覆い、瘡蓋を静かに溶かし、日本文化という本来の日本人の心の皮膚を再生しようという考え方であり、その事が、海外からの我が国の真の理解、翻って、我が国の人びとに対するアイデンティティの再生に繋がると考えていますし、それを具現化する「ICTモデル」の構築そのものが、「**日本文化開国論**」に於ける「開国すること」の実体です。

■日本文化開国論の具現化

具体的には、ICT 等の電子メディアを使い、世界に向かって「日本文化の総体を提示する事」がコンセプトそのものを発信する事になり、新たな「文化外交」や「観光政策」になると考えています。

前述した（**■ブレイク・スルーの道はあるか**）様に、情報化社会と言う現代にあって、その手段となるのが ICT 等の電子メディアを使ったインターネットでの情報発信です。

また、これらの ICT 等の電子メディアの特質は、文字や映像、音声を同時に融合する事も、あるいは、時空を超えた表現や編集も可能にしている事です。

翻って日本文化を考えるときは、日本と言う国の自然環境を見つめる必要があります。北は北海道の亜寒帯、南は沖縄の亜熱帯と言う、南北に 3,000km の距離があり、北海道に雪が降っている時に、沖縄からはサクラの便りが届きます。亜寒帯から亜熱帯まで、豊かな自然からは四季折々の豊かな実りも届けてくれます。

このような自然が、一方では毎年の様に台風となって日本列島を襲い、時として地震や津波などによって、私たちの暮らしは、常に自然と共にあるのだという事を意識させます。

また、周りを海に囲まれている島国であると言う事から、山の幸と共に海の幸も届きますし、これまでもそうであった様に、他国からの侵略を防いでくれています。

このような自然環境そのものから生まれ、育まれてきたものが日本文化であり、日本文化の特質とは、各地に残るそれぞれの時代を証言する文化遺産として残されている様に、同じ場所に残る文化の重層性や、多種・多様性こそが日本文化の総体としての特質のひとつです。

これまでの日本文化の紹介というと、その文化についての個別の紹介にはなっても、日本文化の総体としての重層性や多種・多様性を表す事ができませんでした。

文化の重層性や多種・多様性を表すという事とは、それぞれ個別の文化に共通している内在化した精神性を理性的に理解してもらうという事ではなく、提示される画面の内容や状況から、感じ、読みとって頂ける手段である事が肝要です。

言い換えれば、「何を見せるかよりどう見せるか」を具現化させる事が必要です。

技術的には、ICT等の電子メディアによって、日本の自然や位置情報と共に、日本文化の重層性や多種・多様性を同時に編集して表現する事、あるいは、関連する情報等を表示する必要があると言えます。

つまり、「**日本文化開国論**」を具現化する手段とは、ICT等の電子メディアによる情報提示のプロセスにこそメッセージがあり、日本文化の総体や多種・多様性といった特質を、時空を超えてインターネットで発信する事です。

■結びー「日本文化の学び」と言う平和産業の輸出を

これまで我が国は、輸出経済によって支えられてきました。製品の原料となる資源とエネルギーの大半を輸入し、高い技術力によって製品化し、それを輸出して利益を得てきました。

その根底にあるのは、豊かな想像力や思考力、創造する力や高い技術力を生み育ててきた国民一人一人の学びと、それを保障してきた教育力です。つまり、国民の能力そのものが、今の輸出経済を支えてきたと言えます。

しかし、ここにきて内外のあらゆる情勢は大きく様変わりを見せ始めていますが、この事は、先の **■世界から注目されている日本** の後半でも少し触れてきました。

再度になりますが、欧州の金融危機、円高による輸出産業の業績悪化と収益力の減少、生産コストを抑える為の製造拠点の海外移転など、何とか企業自体が維持できたとしても、このまま推移すると、国内の空洞化は進み、私たちの経済が増々疲弊してしまうと言う事は、かなりの確度で現実化するの

ではないでしょうか。今後ともこのままの輸出経済が維持され、継続・発展する事は容易ではないと言うのは、私の考え過ぎでしょうか。

また、話題になっている TPP による第三の開国が実施された時、私たちの精神構造を培ってきた自然環境とも言える農業等の行く末も案じられますし、日本文化そのものへの影響も懸念されます。

ここは一度立ち止まり、私たちの生活を支える経済構造をはじめとした社会システム全体を考え直す必要があると思います。

例えば、円高をメリットとして考えるならば、むしろ、国内産業を盛んにし、内需型の経済に徐々に移行してゆく道も考えられます。

これまで触れてきた様に、我が国の各地に残る多種・多様な文化とその重層性は、その地域の観光資源になり得るし、新たな地域資源を掘り起こす事も可能でしょう。

ただ、前述した **■我が国の役割を考える** の項で述べた様に、これまでの日本文化の理解が、その分野に専門的に関わらない一般的な人びとに対しては表層的な情報提供に終わってしまい、その根底にある日本人の精神性とのツナガリについては、あまり意識する事なく無頓着ではなかったのかと思います。これでは、高学歴化し価値観が多様化している現代に於いては、知的好奇心を駆り立てる事はできないでしょう。

今となっては、心の皮膚そのものが西洋近代の瘡蓋で覆われてしまっており、あたかも、色のついたコンタクトをはめられたまま、日本の文化や文化財、物事等を見ているのと同じではないでしょうか。

これでは、本来の日本人のアイデンティティーが醸成される訳もなく、和歌や俳句、短歌といった行間を読み取る力が要請される文学を生んできたこれまでの様に、また、日本色という、自然そのものから名付けられた色を表す言葉もあるごとく、日本人の豊かな感性と、それにつながる発想力や創作力、想像力、創造力など、私たちのモノづくりに連なる基礎的な能力さえも揺るがしかねません。

これまで述べてきた「**日本文化開国論**」とは、我が国に対しては、瘡蓋を溶かして本来の心の皮膚を取り戻す、私なりの提言です。

また、平和産業の輸出と言う視点から表現するならば、それは、そのままインバウンド政策への支援システムであり、結果的には、情報発信型プラットフォームにも成り得る訳で、このシステムの運営自体も、自立と自律のできるコンセプトを有していると考えています。

これまでの様なパック・ツアーではなく、海外から、しかもそれぞれ個人の人達にとっては、日本文化への興味・関心に基づいた旅行プラン作成の為のデータ・ベースともなり、それらのログ・データからは、海外の人達の日本文化、それもダイレクトな意識を読み取る事も可能であり、それらに基づいた新たな「文化政策」や「観光政策」、「文化外交」も企画できるデータの収集機能も併せ持つ事になります。

今までのような「モノ」の輸出は、我が国の立場から考えれば、お金を払っているとは言え、他国の資源を持ち帰って生産したものであり、そこには常に何がしかの軋轢や不確かさが潜んでいます。

一方、この「**日本文化開国論**」で言う ICT 技術を使った情報システムによる「日本文化の学び」は、インバウンドと言う新たな収益源を生み、他国の資源に頼る事もないばかりか、「学び」による知識の拡散は、知識と言う資源の元は減ることなく、それを受け取った側に新たな知識や知恵を生み、増え続けるという性質の、まさに、情報の発信・共有化によって成立する平和産業でもあります。

大正11年に来日したアルバート・アインシュタイン博士は、当時からその後の世界情勢の混迷を予想されていたと共に、「世界の文化はアジアに始まってアジアに帰る。それはアジアの高峰日本に立ち戻らねばならない。吾々は神に感謝する。吾々に日本という尊い国を作っておいてくれたことを・・・。」と言う言葉を残されています。

また、近年に於いては、若い頃から当時の政権中枢と関わり、その後、文学者・作家として活躍されているフランス人のオリヴィエ・ジェルマントマ氏は、ご自身の著書である <日本待望論—愛するがゆえに憂えるフランス人からの手紙 / 1998年11月刊>の中で、「日本民族の勇気、熱誠、自然や神々との緊密な結びつき、歴史の連続性、文化の奥深い独創性などからして、日本こそ明日の文明の座標軸の一つとなつてしかるべきではないでしょうか。・・・いまこそ日本国民が自己信頼を回復し、自らの特異性を発揮すべき時です。」と書いておられます。

また、このお二人に限らず、先のブータンの若き国王や小泉八雲との日本名で知られるラフカディオ・ハーン氏も同様に、日本人の精神性に注目されておられたし、海外から日本に来られた多くの方々が、日本人の親切な心や振る舞い、親しみ易さに触れて、その後は日本最良になられるという例は多くあります。

このような日本人を育てた精神性や文化の特質は世界に類例を見ない存在であり、ユネスコの世界遺産の登録状況にもそれが表れており、多くの神社・仏閣が登録されている我が国の文化遺産と、他国の文化遺産とは、その評価軸が根本的に異なっています。

具体的には、他国の文化遺産の多くが石作りであり、風化しているとはいえ、創建の頃と変わらず、同じ形、同じ材料で今日まで残されたものであるのに対して、他方、日本の文化遺産の多くは、木造建築であり、年を経るごとに手が入れられて維持されてきた様に、西欧諸国のそれとはまったく異なっています。

ここにも、西欧の石の文化と、我が国の木の文化との違いを見ることができそうですが、我が国の神社・仏閣等の建築物を文化遺産として登録するにあたって、当初は否定的な意見が出たといえます。

同じ材料がそのまま残っているという評価基準と合わないというのがその理由だと言われていますが、それでも文化遺産として登録される事となった理由とは、同じ材料（モノ）の永続性ではなく、その建築物を作る際の手法や様式（コト）の永続性が評価されたものです。

この事実こそ、日本と言う国の自然と共に暮してきた文化に内在している精神性であり、世界の目から評価されている視点でもあります。

我々日本人自身が、ジェルマントマ氏言うところの「自己信頼を回復する必要」と「特異性を発揮すべき時期」であるという言葉の意味を認識する必要があるのではないかと思います。

まさしく、瘡蓋の下にある日本人本来の心の皮膚を外部の風に晒し、そろそろ、アインシュタイン博士や、ジェルマントマ氏らの期待に応えなければならぬ時節になっているのではないのでしょうか・・・。

以上、「**日本文化開国論＝思想編＝**」は、「ICT等の電子メディア」を活用する事によって、日本文化の総体や特質、根源にある精神性や価値観を表現し、我が国の人びとに対してはアイデンティティの再生として、また、海外の方々には、「日本文化の学び」を平和産業として輸出する事でその役割を果たしたいと考え、具体的なシステム活用のメインとなる思想＝概念としてまとめたものです。

なお、具体的なシステムの構成や、画面デザイン・プラン等につきましては、本論の意図から外れますし、冗長になるおそれからあえて割愛させていただきました。

(了)

梶井喜孝 (ミュージアム工学研究所) 記
平成24年1月21日 / 土曜日・大寒
平成26年7月2日 / 水曜日・半夏生
(HPへの掲載に伴い一部加筆訂正)